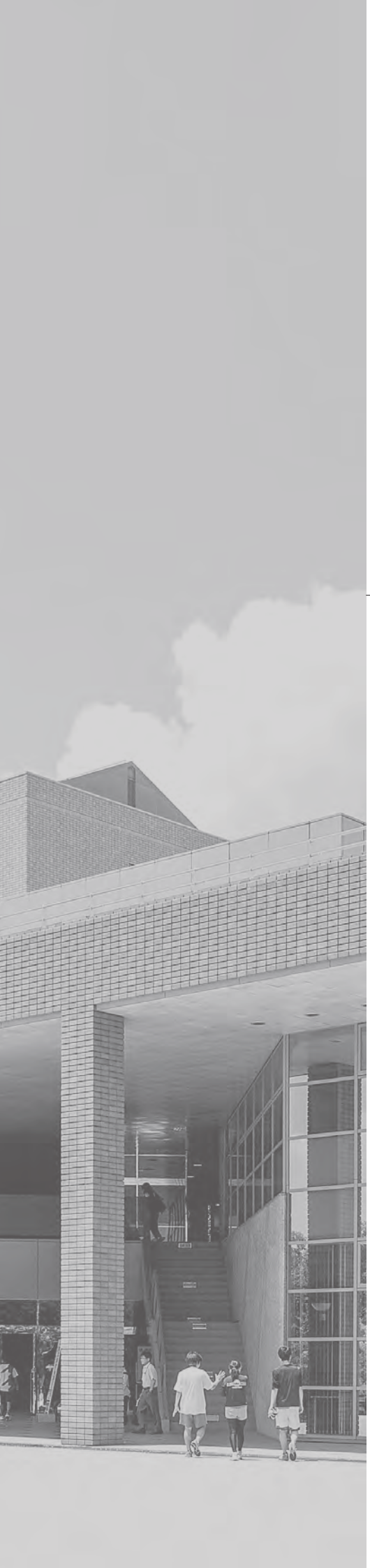

第7部 Part VII

随想

Essay

岡山県立大学の整備・発展当時を振り返って

岡山県立大学名誉教授
山北　次郎

岡山県立大学開学 30 周年を振り返り、情報工学部の元教員として心からお祝い申し上げます。最近、県大卒業・修了生の実社会での活躍を耳にするたびに公立大学としての県大の魅力と充実に切なる慶びを感じています。創設準備から大学開学、４年後の大学院設置、更にその２年後の博士課程設置と、新生大学としての年次進行の実体化に、また大学の教育、研究、地域貢献活動の基盤整備に心血を注いでこられた多数の方々のおかげであると考えています。また、引き続いて実施された難事業である、大学法人化と短期大学部の発展解消に伴う新学科の設置に尽力された歴代学長のご努力に感謝し、現代に至る県大の歩みとその重みを痛切に感じています。

岡山県立大学の整備・発展期間を振り返って考えるとき、多々ある思い出の中でも、" 誰も卒業できない話 "、" 大学院博士課程の設置 " の２つが特に思い出されます。情報工学部１期生だけの問題ですが、シラバスに記された卒業単位に不備があるのを、文部科学省を含め大学側の誰も気づかず、このままでは誰も卒業できないことが判明、急遽、正常に戻す緩和措置を取ったという今となっても笑えない話。また、今後の活躍が大いに期待できる卒業・修了生に対し、大学院博士課程を設置することが、多少無理をしても情報工学部にとって必要不可欠であると考え、岡山県当局の強力な力添えと文部科学省との交渉を経て、やや強引に完成まで成し遂げたことが思い出されます。創設まもない時期の大学当局の色々な不備にも拘わらず、学生諸君の情熱と力強い突破力によって年次進行し魅力ある大学として開学 30 周年を迎えることが出来たと考えます。他方、情報工学部の３番目の新学科設立においては、明るく人間力豊かな学生と接し、急速に変動する現代社会に柔軟に対処し得る若者の存在を確認することができ、少子高齢化の進む我が国の将来に少なからずの明るさと希望を感じることができました。大学の魅力とはその歴史の古さではなく、卒業・修了生の活躍が変化に富んだ現代社会において如何に認知されるかであります。卒業・修了後の実社会での活躍が今後の岡山県立大学の歴史であることを信じています。

終わりに、公立大学として国内外に羽ばたき、また知の拠点として地元県民に愛される岡山県立大学の一層の飛躍と発展を期待いたします。

開学から18年間、思えば貴重な体験でした

岡山県立大学名誉教授
大河内信雄

工芸デザインを生業にしていた私が、新しく出来る岡山県立大学で教鞭を取ることとなり同僚の教授と二人で大学が建設されるという場所に吉備線（現・桃太郎線）で行って見た。服部駅は週刊新潮の表紙の谷内六郎さんの絵の世界だった。改札のところだけに屋根がありホームには傘付きの電灯が立つ無人駅。あたりは田んぼで大学建設の工事の様子は全くないがテントが張ってあった。同僚と畦道を進みテントにたどり着くとそこでは発掘作業が行われていた。作業の人が「この一帯というか総社全体は何をするにもまず発掘、これが完了しないと建物も道もできない。」二人は「おいおい、大学出来るんだろうな？」ところが何とここから縄文時代の稲作文化の起源を遡らせる貴重な遺物が出て新聞を賑わせた。

そんな訳で、岡山県立大学には開学から関わった。と言うことは不思議な光景に出くわす事となった。広い学舎に「一年生しか居ない」という事態です。大学祭も学生たちは学部を超えてのアットホームな雰囲気でした。徐々に仲間が増え賑やかになり大学としてのエンジンが全開になって行く。

わたし的に一番心に残ることは「共同研究機構」が出来て、情報工学・デザイン・保健福祉・短期大学の各学部から選ばれた副機構長（機構長は学長）そして企業コーディネータを加えた方々との交流でした。世の中「産官学共同研究」が声高に叫ばれる中「県立大学のシーズを発信しよう！見てもらおう！」と昼食を共にしながら語り合い、我々は第一回目の学外での研究発表会を岡山コンベンションセンターで実現した。

私の学生との関わりは一貫していて、一言で言えば「４年間で何か夢中になれることを見つけよう！」これです。その手助けをすることが私の仕事。人は夢中になると、他人から見るととてつもない努力を要する作業が、苦労どころか快楽に変容する。人生どの時点からでも夢中になれることさえ見つけ出せれば「ああ～楽しいなァ～楽しかったかったなァ～！」と有意義な人生が送れるのです。

大学からはすっかり遠のいてしまったのでアドバイスめいたことなど何一つ言えませんが、川の堤防をコンクリート（硬直した規則）で固めてしまうと何が起きるか？一見安全に見える、ところが肝心の魚が居なくなる。先生がのびのびとした環境にいないと、活きの良い優秀な学生は集まってこない。だから大学にはビオトープ的発想が必要かも・・・。

看護学科開設時を振り返って

岡山県立大学名誉教授
掛橋千賀子

岡山県立大学の開学 30 周年をこころからお慶び申し上げます。

私は県立大学の前身である岡山県立短期大学看護学科の一期生として 1968 年に卒業し、臨床看護師として働いた後、恩師から縁を頂き 1986 年から 2012 年までの 26 年間、県立短大・県立大学の看護学科に勤務いたしました。入学したときは公立短期大学の看護学科としては全国で2番目の設置で、短大で看護教育を行っているところは少なく先生方より「あなた達は新しい看護教育を受けているのだから」と何かにつけていわれておりました。それから約 30 年に亘る県立短大での看護教育の実績が評価され岡山県立大学保健福祉学部の一学科として看護学科が設置されました。その頃も4年制の看護系大学は全国でも 10 数校という状況でした。教員は私を含め県立短大から7名、東京やアメリカでの教育経験を持つ 10 数名が赴任しました。ほとんどの教員が4年制大学での看護教育の経験はなく、看護を大学で教育する意味とは何かがそれぞれに問われました。私自身、開学時は短大最後の学生の実習指導や講義をしながらの兼務でしたので短大と大学の看護教育の違いは何なのか、切り替えはどのようにしたら良いのかを模索する日々でした。それぞれ受けた教育や経験が異なる先生方と新しい看護教育に向かい意思統一をしていく過程から学ぶことは多くディスカッションも刺激的でした。当時の奥井学科長が「文化が違う」とよくいわれていましたが、この言葉からご苦労がうかがえます。全国から優秀な学生が集まり、教員共に4年制大学における看護教育への期待が高く、創造的な教育の取り組みが学生と一緒にアットホームな雰囲気のなかで行えたように思います。このアットホームな雰囲気は看護学科の魅力の一つでもありました。開学4年後には保健福祉学研究科修士課程を、2003 年には博士課程の開設に至りました。当初は研究指導体制や研究環境が整っておらず教員、院生共に大変な事もありましたが、研究中間発表を看護学専攻全体で行うなど、教員全員で院生を育てるという指導体制を整え、優秀な修了生を数多く輩出し、現在では全国で活躍しています。

振り返ってみますと岡山県の看護教育への取り組みは、常に先駆的な視点で行われており、誇り得るべき長い歴史があるといえます。

今後ともみなさんの叡智を結集し、岡山県立大学を益々発展させていってくださることを願っております。

冬来たりなば

岡山県立大学名誉教授
三宮　信夫

岡山県立大学創立 30 周年誠におめでとうございます。私は、この期間学長として9年間在職させていただいたので、当時を振り返りたいと思います。

就任当初（2004 年）、石井知事より「これまでの本学の不祥事を顧みて大学改革を実施してもらいたい」と言われました。私はそれまで岡山県在住でなかったので、当時の事情を全く知りませんでした。調べてみてその不適格性は明らかで、大学として冬の時代だったと感じ、改革の責任感を強く抱きました。

改革として、本学を法人化し短期大学部を廃止し、その人材をもって大学充実、具体的には情報工学部にスポーツシステム工学科を新設し、保健福祉学科を整備しました。現在では、スポーツのシステム化は常套手段ですが、大学教育に設置するのは当時新鮮でした。また、大学間交流協定締結のため中国の大学を訪問したとき、先方の大学より高齢社会に突入している中国での福祉分野の教育法を知りたいとの要望を強く感じ、国際貢献に寄与すると感じました。このような学科改革の成果は、改革を意識した学科の教育研究活動次第であると思います。

私は、文部科学省科学研究費補助金（以下科研費と呼ぶ）の採択増加に尽力しました。科研費は、国が教員個人に研究費を支給するもので、その選考は厳しいが当たれば研究者として一人前であることが全国的に認められます。私は、本学が県立の故に設置者も教員も科研費に余り関心がないと感じました。これを改めるため、希望者には申請書の作成に個人的にアドバイスをしました。その成果は端的に現われ、法人化後6年間で採択件数が 10 台から 50 台に右肩上りで増えました。また 2007 年度には、700 以上の国公私立大学、研究機関からの募集の中で、本学は採択率が 25 位（採択率 30.4%）となる快挙を得ました。このことは、岡山大学の先生方から誉められ、羨ましがられもしました。ちなみに、この年 30 位までに入った公立大学は、３大学のみでした。

私は、教員の方々に「学長は今何を考えているのか」を示すために、毎週月曜日「学長メッセージ」を各教員にメール発信しました。これを読んで、学長の意図や期待を理解してもらった積りです。同メッセージは 150 回に及びました。

さて、私の在任中に本学に春はやって来たでしょうか。その評価は皆様に委ね、今後の本学の益々のご発展を、湖国近江より祈念しています。

岡山県立大学名誉教授
辻　英明

私は、1997 年に、徳島大学医学部栄養学科から岡山県立大学保健福祉学部栄養学科の食品学分野を担当する教授として赴任し、2013 年 3 月に定年退職しました。その間、小麦、大豆におけるアレルギー誘因物質の探索、血糖値降下作用成分など機能性成分の探索などの研究活動に従事しました。研究以外の活動として、赴任時に、岡山大学薬学部山本格教授が中心になって設立した岡山県生理活性物質研究会（後におかやまバイオアクティブ研究会に改称）に参加し、岡山県下の食品企業を中心とした産業の活性化に寄与してきました。とりわけ、2005 年から 2011 年まで当研究会の会長を光栄にも担当させていただきましたが、大学の地域貢献に果たすべき重要性を痛感し、大学の地域貢献の役割を強く認識しました。また、保健福祉学科中嶋和夫教授が当時独自に交流していた韓国ウソン大学との交流にも参加し、ウソン大学食品栄養学科との間にシンポジウムなどの学術交流を展開しました。その後、中国の四川大学及び南昌大学にも学術交流の輪を広げ、学術交流の大きな活動の一つとして、毎年1回、順番に各大学で食品・栄養学分野に関するシンポジウムを開催しました。こうした活動などを通して、本学は韓国と中国との国際交流が大きく進展しました。一方、本学は 1993 年に設立した比較的新しい大学だったため、栄養学科は全国的にも中国・四国地区においても目立たない存在でしたが、2018 年、栄養学科の基幹学会である公益社団法人日本栄養・食糧学会の第 72 回全国大会を私が会頭として本学で開催しました。全国から 2000 人あまりの研究者が一堂に会して学術集会が行われました。栄養学及び食品学の多くの専門家が本学の構内で研究発表及び学内を闊歩する姿を見て、大学内でこうした全国大会を開催する意義を強く感じました。このような活動及び栄養学科の諸先生の努力により、私が学長を退職した時点では全国的に存在感ある学科となっていました。今後その存在感をより一層高めることを期待しています。前任大学では、栄養学科は医学部に設置されていたため、大勢力の医学科に圧倒されて栄養学科における活動は窮屈でしたが、当大学では保健福祉学部の3学科は対等かつ平等な関係であったため、16 年間自由でのびのびと教育及び研究に従事するとともに、大学運営に係わることができ、幸せでありました。

定年退職後、私は、縁あって、多くの先生方に支持されて岡山県立大学の理事長兼学長に就任しました。当該大学は、1993 年に、長野士郎 元岡山県知事が、人間尊重と福祉の増進を建学精神とし、岡山県下に有為な人材を送り出す目的で保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部の特徴的な 3 学部からなる大学として設立されたものであります。建学当時の社会状況を考慮すると、本学の専門性はバランスの取れた、正に社会が求めるものでありました。私は、就任にあたり、この建学精神を踏まえて、「教養教育の推進」、「国際交流の推進」「地域貢献の推進」の 3 つの基本方針を策定し、大学教育センター及び国際交流センターを設置するとともに組織を抜本的に改革し、地域から期待される大学を目指しました。当時、大学の卒業生は幅広い教養と確かな専門性を修得することが求められていましたので、本学の全学教育のカリキュラムを根本から見直し、教養教育の充実に努めました。とりわけ、学問は学んだ事柄を「実践」を通して確認し、把握することが肝要でありますので、この概念を全学教育に組み込むことに努めました。しかし、このような教養教育の充実は時間のかかる課題ですので、未だに課題として残っています。また、国際交流を推進するため、特定非営利活動法人 AMDA と連携して、海外の大学との学術交流協定を締結し、インドネシア、ネパール、タイ、台湾、メキシコ、オーストラリアまで交流先を拡大しました。しかし、交流先は拡大しましたが、海外の協定大学との実質的な交流の推進は、未だに本学の学生及び教職員の理解と努力がより一層求められるところであります。一方、2015 年に、本学が中心となり、岡山大学を含め、岡山県下の9大学が連携した「地域で学び、地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」が文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC +）」に採択され、総社市、笠岡市、真庭市、備前市、岡山市（後に赤磐市も参画）に拠点を置き、大学と地域が一体となった活動を展開し、当大学は岡山県下で期待される大学として大きな一歩を踏み出すことができました。

2019 年 3 月に任期満了で、当大学の理事長兼学長を退任しましたが、後任として選ばれた沖陽子現理事長兼学長が子ども学科と建築学科を新設し、更に、上記事業の後継事業として、2020 年に『吉備の杜』創造戦略プロジェクトが「地方創生人材育成プログラム構築事業（COC+R）」に採択されて当大学を中核として地域貢献活動を強力に推進しております。このように岡山県立大学が地域貢献を推進し、地域から期待されつつある姿を拝見して大変頼もしく思います。今後さらに当大学が真に地域の中核大学として発展することを期待します。

岡山県立大学現代福祉学科（旧保健福祉学科）創設30周年に寄せて

岡山県立大学名誉教授
田内　雅規

1993 年に4学部構成で開校した岡山県立大学では、保健福祉学部に看護、栄養、保健福祉の 3 学科が置かれた。開学から 30 年が経った今、時代変革の大小の波に洗われながらも勢いを失っていないのは創設時メンバーの一人として大変喜ばしい思いである。保健福祉学科の創設は、世界に先駆けて起きた日本の人口高齢化による高齢者福祉への対応が一つの大きな目的であった。そこに従来の障がい者福祉や福祉システムの既存パワーを援用すると共にそれぞれの一層の充実を図ることも重要な課題とされた。

岡山県では従来県民の保健・医療と福祉は別々の担当部署が担っていた。それは前者が保健・医療系学問を、後者が社会学・社会福祉学を基盤としていたことから当然の流れであった。しかし高齢化や福祉の高度化を受け、個人の健康を保健・医療と福祉の両側面からとらえる必要性が生じてきた。これは WHO 憲章にみる健康概念（健康における身体的・精神的・社会的側面の充実）の実現に是非必要なことであった。そのため、保健、医療スタッフとの連携が可能な身体・心理に係る基礎知識を併せ持つ社会福祉系人材を養成するという方針の下、日本初の「保健福祉」を冠する保健福祉学科が創設され、その考えに沿ったディプロマ及びカリキュラムポリシーが作成された。また岡山県でも同時に保健福祉部が発足し、県と大学が意識を共有するところとなった。

当時として大変ユニークな発想の人材養成ポリシーでありその概念は現在も色褪せていないが、本学以降、「保健福祉」を大学や学部・学科名称に使う大学が一気に増加した。それらの多くが介護・看護他の医療系及び福祉の資格養成課程を束ねるタイプのものであったため、本学の保健福祉学科が目指した新時代の社会福祉系人材の養成という観点をストレートに伝達しにくくなったことは否めない。そのため 2022 年度から長年親しまれてきた学科名を「現代福祉学科」に改称したのは有意義な決断であったと言える。この名称は、社会情勢の変化に機敏に対応しつつ学科のポリシーを内外に発信して行くために有利でフレキシブルであると言えるのではないだろうか。

学科の諸兄姉におかれましては本学科の社会福祉系人材養成の発端をご理解いただき、改めて学科の教員構成やポリシーがユニークなものであることを今一度意識され、将来の学科の維持・発展に果敢に挑んでいただけるならば大変ありがたいことであります。

日に新たに、日に日に新たに！

岡山県立大学名誉教授
渡辺　富夫

30 周年を迎え、誠に嬉しく思います。

思い起こせば、本田和男先生（初代学部長、 3代目学長）からの思い溢れる直筆の手紙に感銘し、情報システム工学科知識情報処理講座教授として開学の 1993 年に着任致しました。当時は、情報システム工学科と情報通信工学科の 2 学科のみの学部で、文字通り「システム」と「通信」の違い程度で、必須科目と選択科目を交互に入れ込み、両学科で情報技術者を育成する体制でした。両学科の学生を隔てなく、実に親密な関係で一緒に創り上げていくような感じでした。一方、一期生を世に送り出し、今後の社会受容性を鑑み、情報工学＋αで両学科を特色づけようと、情報システム工学科には機械工学を、情報通信工学科には電子工学の学問を取り込み、新たな教育改革が実行されました。情報システム工学科は物理法則に従うものづくりの機械工学と物理法則に支配されない情報工学を体系的に学ぶ学科として生まれ変わりました。我々は実空間とサイバー空間を行き来して生活しています。この実空間とサイバー空間を高度に融合させ、人をつなぐ人間中心の社会「Society 5.0」時代を切り拓くに相応しい学科です。また情報通信工学科は ICT を、第 3 学科の人間情報工学科はヒューマンサイエンスを軸に、情報工学部は心豊かな未来社会を創造する学部として展開されてきました。

岡山県立大学は「人間尊重と福祉の増進」を建学理念とし、保健福祉学部とデザイン学部とともに、Well-being に貢献する大学で、いくらでも無限に学び、研究できる恵まれた環境にあります。この大学の環境だからこそ、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業等、学部を超えての幾つもの大型プロジェクト研究を推進することができました。何よりも夢を共有してのワクワク感は最高です。日に新たに、日に日に新たに、近未来を先取りする思いで、その未来感覚を大いに楽しみました。感謝しかありません。大恩に報いるべく、共創の場づくりにお役に立ちたいと思っております。

どうぞ日に新たに、日に日に新たに、岡山県立大学の益々のご発展を祈念しております。

県大の日々に「エウレカ！」あれ

岡山県立大学名誉教授
吉原　直彦

古代ギリシアの科学者アルキメデスは入浴中に風呂桶の水位の上昇をみて複雑な立体の体積や比重を計算するヒントを得たそうです。その時彼は「エウレカ！（見つけたぞ！）」と叫んだそうな。この逸話は日常の出来事にも頭の奥の「紐のもつれ」がほどけるチャンスがあることを伝えています。

開学時に着任して5年ほどの冬、ある巨匠先生との合同ゼミで打ち上げる機会があり、安酒場の座敷で一同大いに盛り上がりました。宴たけなわとなるも吉備線の終電が頭をよぎり記念写真をと相成りました。巨匠と私はカメラを構えた学生のうながすままに「はいチーズ！」。その刹那、私は陽気な巨匠の熱烈歓迎を頬に受け、ギョッとしました。

翌週、学部棟5階の壁に A3 サイズに収まる、満面の笑みをたたえた私と巨匠との「チーズ写真」がありました。

そのとき私は心の中で「エウレカ！」と叫んでいました。

5年後、初代学科長から引き継いだ講義「視覚伝達論」で「静と動」について話す機会があり、フランスの 19 世紀ロマン派画家ジェリコーの絵、「イプサムの競馬」をあげ、サラブレッドがみな前後の脚を投げ出して矢のように跳ぶポーズに注目させました。19 世紀の写真家たちは、それが「生物学的に間違っている」ことを連続写真で証明しましたが、彫刻家ロダンは「写真が間違っている」と言ったそうです。彼は「動きの本質は機械が描く光の瞬きではなく意識の持続にある」と信じたようです。事実彼は彫刻のデッサンのために「モデルを歩き回らせて」いました。

さて本学着任の少し前、私にも「もつれた紐」が一つ潜在していました。ある有名美大入試のデッサンモチーフに「生きたひよこ」が配られ、受験生のなかに紙をとめる画鋲でその水掻きをとめた者がいて、大学は大新聞の攻撃に晒されたのです。私は問題の本質を詮索するも、やがて問いを心の奥にしまい込んでいました。

そしてあの冬、陽気な巨匠の仕掛けた「チーズ！」と学生の機転のおかげで、刹那を切り取る写真の罠に気づき、「静と動」のテーマを調べ始め、「意識に立ち現れるひよこの動勢」を描く技量をみる出題意図に気づくことができました。そして件の受験生の意識から「動きが遠のき」、科学の光が瞬いて眼が眩んでしまったことも。

「エウレカ！」の機会は日常に潜み、隠れた課題を想起させるはず。これに備え「問い」をもち続けること。それはこの 30 年間で学生たちに伝えたかったことでもありました。